聖カスバートの『移葬記』

水　島　ヒ　ロ　ミ

はじめに

ローマ教皇庁が聖人の認定を制度化させたのは、1234 年以降であり、その手続きの方法が確立したのは 13 世紀ということになっている。カンタベリー大司教、トマス・ベケットのように、ローマ教皇庁がその列聖（1173 年）に関与した例もあるが、それ以前の殉教者や聖人の場合、聖人であることの根拠は、聖人信仰の展開と平行して「作られた」。「捏造された」場合もあっただろう。そこに様々な思惑が絡んでいたことは言うまでもない。病気を治し、超自然現象を引き起こすというような奇蹟が、なぜかある時期頻発する。その中心となったのが聖遺物であり、それが安置される墓所だった。

聖遺物は遺体に限らない。聖カスバートの場合には、履いていた靴が病人を麻痺から回復させ、庵の隙間をふさぐ仔牛の皮が顔の腫れを治し、死後切り取られた髪が病人の目を癒した。さらに墓所で眠る中風を病んだ修道士の夢の中には、癒し手としての聖カスバートが現れる。

また、数々の聖人伝や奇蹟録、殉教者録が書かれ、書き直され、編纂された。これらの記録はその信憑性よりも、例えば 11 世紀、ヨーロッパ社会で聖遺物がいかに機能していたかを示す、という点で重要である。この種の文字史料や視覚史料はあくまで意図があって作られている。11 世紀には聖遺物は社会のシステムに組み込まれており、聖遺物の有無が集人力に関係し、その保有者である教会や修道院の経済状態に多大な影響を及ぼした。聖遺物に関連して、聖人の移葬記や死後奇蹟の記録はさらに作られ続ける。聖遺物がどのような経路を経て到来したのか、分割、盗み、売買、取引を公然と記す移葬記は数多い、とP・ギアリは言う(1)。

聖遺物を取り扱う業者は、特に中世初期、フランク王国の聖職者の関心を引いた。これは結果としてローマからガリアへという構図を作り出し、ローマの優位性を決定づけることになる。そしてそれと同時に聖遺物の移動に伴う聖性の根拠が、移動先で再確認されなければならなくなった。こうして、聖人を聖人として生き残らせるためには、絶えず、「確認」が必要とされた。移葬という儀式は礼拝の「中心」を明確化するパフォーマンスの一つである。土地や物品の寄付の対象となりうるのは、こうした聖遺物に他ならない。11 世紀末、北部イングランドにおけるノルマンの拠点としてダーラムが浮上してきた時、その中心に位置づけられたのが他ならぬ聖カスバートの遺体であった。

Ⅰ　聖カスバートの遺体

聖カスバートは、中世初期からイングランド東北部、ノーサンブリア地方を代表する聖人の一人であり、ベーダによれば、687 年にファーン島で死亡した後、リンディスファーンへ運ばれ埋葬された。（図 1）ベーダは『聖カスバート伝』（成立年代の下限 721 年）の中で 11 年後の 698 年、棺が開けられた時の模様をこう記している。

「……彼（聖カスバート）の埋葬から 11 年後、修道士たちは、からからに乾いた骨だけを取り出し、つまり他の部分

は他の死者の場合のように朽ち果てて、ちりになってしまっていると思われたから、軽い櫃に入れて（埋葬されていたのと）同じ場所に、しかし（今度は）床の上に置いて、礼拝するのにふさわしくしようと思い立った。四旬節の中頃、彼らがその決定を司教であるイードベルト Eadberht に報告すると、彼はその計画に同意し、3 月 20 日の彼の埋葬された日に執り行うことを考えるよう命じた。彼らはその通りにした。棺を開けてみると、全く傷みのない状態で、まるで生きているかのような遺体を見出した。四肢の関節はしなやかで、死者というよりも眠っている人のようであった。さらに彼が身にまとっていた衣類は、清浄であるばかりか、全く新しいままで、おどろくほど輝いていた。彼らはこれを見るや、大いなる恐怖と戦慄をおぼえ、ほとんど言葉も出ず、目の前で明らかになった奇蹟を見つめるわけでもなく、どうすればよいのか分からなかった。しかし、彼らは彼の遺体の元のままである証拠（incorruptionis signo）を示すために、外の衣服の一部を取り去った。というのも、皮膚の近くにある物にはあえて触れようとしなかったからである。彼らは急ぎ司教のもとへ向かい、彼らが見出した物について知らせた。彼は、一人、修道院から離れた場所、満潮時に周りを海に囲まれる場所にいた。……（図 2？）彼らは聖なる遺体を包んでいた衣類の一部を彼の所に持っていった。彼は喜びに満たされ、これらの贈り物を受け取り、奇蹟の物語を聞いた。あたかもそれがまだ聖カスバートの体を包んでいるかのように、大いなる愛情をもって衣類に接吻し、そして言った。『あなた方が取りはずした衣の代わりに新しい衣で包み、用意した櫃の中に入れなさい』……　彼らは遺体を新しい衣類で包み、軽い櫃に納め、聖所の床の上に置いた」（第 42 章「いかに彼〈聖カスバート〉の遺体が 11 年の後も損なわれない状態で見出されたか」）(2)。

この段階で、聖カスバートの遺体は地下から地上に移された。この時の櫃の断片は現在ダーラム大聖堂の宝物庫に展示されている。このベーダの『聖カスバート伝』にはその元になった作者不明の『聖カスバート伝』があった。次にそれを示そう。

「11 年後、聖霊の励ましと教えによって、共同体のもっとも信心深き人々は、長老によって会議が開催された後、司教イードベルトから権限が与えられていたので、聖なる司教カスバートの骨の遺物を（reliquias ossium）彼の棺から取り出す

ことに決めた。棺を開けると、彼らは驚くべきことに、11年前、彼らが埋葬した時のまま腐敗していない（integrum）遺体を見い出した。皮膚はしなびてもいなければ、古びてもいなかった。筋肉は乾き、体はまっすぐにこわばっていたけれども、四肢は静かに休らい、生きていた時のように関節のところで動いた。彼の首や膝は生きている人のもののようで、さらに、墓から持ち上げると、彼らの望むように曲げることができた。遺体の皮膚に触れた着衣や履き物は古びてはいなかった。遺体の頭部を包んでいた布をほどくと、彼らはそれがもとの白い美しさを保っているのを見出した。彼が履いていた新しい靴は証拠として、聖遺物とは別に今日まで私たちの教会に保存されている」（第4書14章「11年後いかに遺体が損なわれずに見出されたか」）[3]。

両者を比較すると、ベーダの記述には、祝祭日を中心に聖人礼拝が形成されていく、当時の一般的な傾向が反映されている。それについて司教の指示を仰いだということも、看過できない。この段階で聖カスバートとダーラムを結びつけるものは何もない。

Ⅱ　移葬の日の目前に　1104年8月24日

875年から、最終的に995年にダーラムに落ち着くまでの120年間、聖カスバートの遺体は移動を重ねた[4]。さらに約200年後、ノルマン人司教（ダーラムの場合は修道院長も兼ねる）ウィリアム（在位1081－96年）は、1093年に新しいノルマン様式の大聖堂建設に着手する。この建物はラヌルフ＝フランバルドRanulf Flambard（1099－1128年：96－99年の間、司教職は空位）が司教であった1104年には、その内陣部分が完成しており、この年の8月29日、大聖堂の祭壇の背後に聖カスバートの遺体が移葬された。この移葬に関して、作者不明の『移葬記』が残る[5]。この『移葬記』自体も、ダーラムの正統性、修道士の諸権利の保護を目的として書かれた可能性が強いとみられている[6]。

『移葬記』は、聖カスバートの遺体が改められた様子について述べており、移葬の日に先立って内々に遺体が改められた次第と、教会の外部の人間が立ち会った遺体の検証について語っている。内々の確認は8月24日の日没後からその翌日にかけて行われた。聖カスバートの遺体が櫃の中に実在するのかどうか、そしてそれが一体どのような状態にあるのか、この2点について確実な情報を得られないまま移葬の日を迎えることが、修道士たちにとっては大きな不安だったのだという。立ち会った修道士はPrior（副修道院長）のトゥルゴ（1087？－1109年）を含め9人、彼らは櫃を締めていた鉄の留め具をはずし、棺のふたを持ち上げた。

「彼らはその中に木製の棺を見出した。それは三重織りのぶ厚いリネンの布によってすっかり覆われており、人の丈ほどの長さで、同じ様な木のふたがかぶせられていた。彼らは長い聞逡巡した。というのは、ここに聖なる体が実際に眠っているのか、それともこの内側にさらに聖遺物を入れたものがはいっているのかはっきりしなかったからである。最後に彼らはベーダの言葉にはっと思い当った。ベーダは聖カスバートの遺体がリンディスファーンの修道士たちによって、埋葬から11年後に損なわれていない状態（incorruptum）で発見され、それにふさわしい礼拝のために床の上に埋葬されたと記していた。これを思い起こし、そう、彼らは、これがまさに同じ棺であると分かったのである、長年にわたりそこに比類のない宝が託されているはずだ。

それ故、彼らは地に伏し、聖カスバートに、彼の仲介によって、全能の神の怒りを、もし彼らが彼らの推測によって招くのであれば、それを免らせてくれるように祈った。彼らは喜ぶと同時に畏れた……」[7]。

この修道士たちの畏れに対し、修道士たちの中の一人レオフインが進み出て、棺のふたを開けることが神の意志に従う事だと力説し、修道士たちは遺体を祭壇の背後から内陣の中央に運んだ。広い場所の方が、調査に適していたからである。

「次に棺を包んでいるリネンを取り除いた。彼らは直ちに棺を開けることを恐れていた。そして棺の割れ目の隙間から、

または何らかの方法で内容が確かめられるかもしれないという期待から、注意深くろうそくの光でその外側を調べた。そうやってみても彼らは何も得られなかったので、そこでおそるおそるふたを動かすと、頭の方が低くなった水平な間仕切り板の上に、一冊の福音書が見えた。仕切板はそれ自体3本の横木で支えられており、棺と同じ幅と長さがあったから、下のものを完全に隠していた。2 つの鉄の輪が、一方は頭部に他方は足下に通っており、そのおかげでそれを持ち上げることは少しも難しくなかった。疑いはもはや残っていなかった。探しているものが彼らの前にあることは確かだった。しかし、彼らがそれを手で扱うことについてはまだ躊躇していた。彼らの気持ちを引きつけていたものを見、触れることを熱望したが、罪の意識からくる畏れが、その企てから彼らを遠ざけた……」(8)。

彼らは勇気づけられ、ついには間仕切り板を取り外し、そこに遺体を見出す。

「彼らはついに板を持ち上げ、その下の、神聖な遺物を覆っていた亜麻布をはずし、この上もなく甘い芳香を嗅いだ。見よ、彼らは、祝福された父の尊ぶべき遺体を見出した。……　完全な状態で右の位置に横たわっており、四肢のしなやかさから死者というよりも眠っている人のように見えた。彼らはこれを見たとたん、大きな畏れの念におそわれ、後ずさりし、目の前の奇蹟を直視できなかった。何度も何度も彼らは跪き、こぶしで胸をたたき、目と手を天に向けて叫んだ。……　それぞれが何を見たかを述べた。あたかも自分だけが見たかのように。しばらくして彼らは地にひれ伏し、とめどなく涙を流し、7 度悔罪詩篇をくり返し、激昂して彼らを罰することがないよう、怒りから彼らを懲らしめることがないよう神に祈った。

これが終わると、彼らは足というよりも膝と手を使って棺に近寄り、その中に小さめの棺では入りきらないほどの多くの聖遺物を見出した。すでに述べたように、右側に横たわっていたため、彼の横にはものを安置するのに十分な空きがあった。これらの聖遺物は、古い書物から拾い集められたような、栄光に満ちた王であり殉教者であるオズワルドの頭部、キリストの証聖人であり聖職者のアイダン、そして聖カスバートの後継者イードベルト、イードフリット、そしてエセルウォルドの骨があった。さらに聖カスバート伝を記した尊者ベーダの骨があり、これらは聖カスバートの傍らに安息場所を得ていた。その他、小さなリネンの袋に入ったものがあった」(9)。

かつて聖人は畏れられるべきものであるという考えが作り上げられた。ここで修道士たちが聖人の遺体に抱く畏れは、具体的には、聖カスバートの死後奇蹟の記録から説明されるだろう。聖カスバートの意にそぐわない出来事には、懲罰という形での奇蹟が待っていたのである(10)。

さて、『移葬記』の中で、修道士たちの見出した遺物が、聖カスバートの遺体でありアイダンの頭部であり、ベーダの骨であるとみなす根拠は述べられていない。作者は、「この上もなく甘い芳香」、「四肢のしなやかさから死者というよりも眠っている人のように」という常套表現によって聖人であることを示しているにすぎない。

「命じられた二人が、一方は頭の方に、他方は足の方に陣取り、聖なる遺体を眠っている場所から持ち上げると、固い肉体と骨の自然な重みから、生きている人間のように真ん中が下がり始めた。三人目の人物がこのために呼ばれて駆け寄り、彼の腕で中ほどを支え、タペストリーや他のローブを敷いた床の上にうやうやしく下ろした。彼らの喜びは大粒の涙となり、祝いの言葉に満ちあふれ、歓喜を讃え、彼らはついに黄金さえも色あせて見えるほどの比類なき恩寵の宝を目にした。彼らは今全てを手に入れたと考え、彼らの眼前に、あたかも生きているがごとき彼を見たのである。そして彼を通して、神の贈り物、この世での保護と来世の喜びが下される。

この間、聖人たちの遺物は取り除かれ、彼らは父なる聖人の遺体をその棺に戻した、よりきちんと安置するつもりだったが、それは次の夜のこととした。夜の祈りの時間が来て、もはや時間をかけることができなくなったのである。彼らは

低い声でTe Deumを歌い、その後歓喜の詩篇を歌い、もとあった場所へ遺体を運んだ。

朝が来て、修道士がみなそろったところで、神のすばらしい御業が事細かに報告された。彼らは始め事態の意外さから茫然となっているように思われた。言葉によってよりもむしろ涙によって、彼らは喜びを表し、そして彼らがそのような聖人をもっていると知らされた、そのことに対して、さらに彼の功徳が彼らに希望を抱かせることに対して、膝を折り曲げ、イエス・キリストへの感謝を申し述べた。しかし、司教（ラルヌフ＝フランバルド）は、そう簡単にその報告を信じなかった。だれであれ、それが聖なる人であっても、人間なら、418年の長きにわたって、腐敗によるすべての汚れを免れて損なわれずにあるというのは信じがたく思えたからである。誓約も彼を満足させなかった。それが、宣誓をせずとも真実を語らなければ罪であると考える人々によってなされたのであっても」(11)。

「腐敗しない遺体」、修道士たちにとっては奇蹟以外の何物でもない。列聖の手続きが確定する以前、遺体が腐敗しないということが聖人であることの証明の一つだった。見出された遺体が聖カスバートのものであることの状況証拠が、次にその着衣等から示される。

「次の夜、前回と同じ修道士たちは、謙虚な気持ちと悔い改めた心から、ふたたび尊い遺体を内陣の真ん中までもっていき、床の上に拡げたローブとタペストリーの上に置いた。外側を包んでいたのは高価な種類のローブであり、その下はパープルのダルマティカで包まれ、さらに亜麻布で包まれていた。これら全ては完全で美しく、いかなる腐敗の汚れもなく、元の通りの新しさだった。彼が 11 年間墓の中でまとっていたカズラは、この時修道士たちによって取り除かれ、遺体が腐らぬままであったことの証拠として教会に保管された。彼らは彼らの目で検証し、彼らの手で上げたり下げたりして、それが固い筋肉をもち、全く傷んでおらず、細心の注意が払われていたことを知った。彼らはそれがすでにまとっていたローブに加えて、教会の中にあった最も高価な棺覆いで覆った。そしてその上を上質の亜麻布で覆った。彼らは大いなる喜びをもってこれを行い、熱心に祈り、甘美な涙とともにその安らかな住居に戻したのである。彼と同時に見出された他の物も、彼の棺に入れられた。つまり象牙の櫛、新しさをとどめた一対のはさみ、さらに聖職者にふさわしい銀の祭壇、聖器を覆う布、パテナ、カリスが加わり、それは大きさこそ小さいが、材質といい、出来ばえといい、貴重なもので、さらに下部に純金製の獅子が象られており、その背が黒い石を支えていた、それは大変美しい出来で、工人の工夫によって中は空洞になっており、はずれはしないが、手で容易にぐるりと回せるように獅子の背中に取り付けられていた。さらに、同じ棺を安置場所として、聖人とともにあった聖遺物のうち聖なるオズワルド王の頭部だけがもとに戻され、以前にそうであったように、司教の頭部の横に置かれた。他の聖遺物はすでに述べたように丁重に教会の別の場所に移され、大切に保管されている。神聖な父の遺体が棺にしまわれるや、彼らはぶ厚い亜麻布で覆い、ろうにつけ、もとあった祭壇の後ろに戻した」(12)。

司教による疑いは晴れたが、次なる異議が外部から唱えられた。棺の中の遺体が果たして聖カスバートの遺体であるのかどうかは、もはや問題外となっている。関心は遺体の状態、つまり「奇蹟」に移っていく。

Ⅲ　遺体の移葬　1104年8月29日

「しばらくして、移葬の日の間近に迫ったことがあまねく知らされると、あちこちから大勢の人々がダーラムに押し寄せた。すべての階級の、年齢の、そして職業の人々が、世俗の人も、教会関係者も、すべての人々が急ぎ集まった。彼らは、奇蹟、つまり死んでから何年にもなる遺体が腐敗を免れ、神から大いなる恩恵を受けたことを耳にすると、そのような驚きが彼らの時代に示されたことに対して、神に感謝し、讃え、大いに喜んだ。しかし集まった修道院長の中で、行われたことを聞いた一人が彼に対してなされた侮辱について不満を述べた。教会の修道士たちが軽率にも不用意に、それほど

重大な、超常のことについて彼らだけで、彼に相談もなく、その場に彼を招くこともしなかったことについて、非難したのである。彼は『近隣のものなのだから、その場に呼ばれていたと、後になって言えるのが当たり前であって、その主張によって真実が証明されるのである』と言った。彼はさらにこう述べた、『彼らは他の教会のメンバーに、彼らの秘密の行いの証人となってほしいとは思っていないのだから、彼らが事実よりも作り話をでっち上げたということは十分ありうる』。彼はこうも付け加えた。『このような驚くべき真実は他の人々によって調査されてしかるべきことである。ここに集まった大勢の人々には、実際に目で見て確かめた事実を、私たちの証言から納得してもらうことができる』。この意見を彼はそこに集まった人々に聞こえるように何度も述べたので、何人かは彼の言うとおりだと思い始めた。移葬の日が迫り、修道院長の非難の発言が伝えられて、修道士たちは彼ら自身に虚偽の汚名がきせられたことに対し、ひどく憤慨した。聖なる遺体がさらに人目にさらされようとしている、これは彼らが他者に許したくもなければ、彼ら自身再びくり返したくもないことだったのである。そうして両者が激しくぶつかった。修道院長は、教会の修道士たちの証明が彼ら自身による証明であるという点で、認められるべきではないと譲らなかった。修道士たちは、彼らへの疑念に対して混乱し、抗議した。『その人物こそが修道院の破滅を、そして私たちの追放をもくろんでいるのだ。私たちの証言を拒絶し、誓約があっても、それを作り話として、私たちを罰当たりで呪うべきものであると思っている』。彼らは言った、『件の人物が、聖なる遺物を見る機会をもつなどということがあってはたまらない。その人物のせいで私たちは耐え難い虚偽の嫌疑をかけられている』。私たちとともに、昨日喜びにあふれ、〈いと高き所には栄光神にあれ〉、と歌った人の中にさえ、今日は修道院長にそそのかされて私たちを疑っている者が少なからずいる』。

どちらも譲らず、議論はとうてい終わりそうもなく思われた。ラルフ、彼はその時ノルマンディー、セーの修道院長で、後にカンタベリー大司教になった尊ばれるべき人物だが、敬虔で穏やかな人柄で、深く聖書を読んでおり、論争の当事者の間にふたたび平和をもたらそうと、仲介者として一歩足を踏み出した。『〈二人ないし三人の証人の口によってすべての言葉は立証される〉と確かに聖書は述べている(13)。しかし、どれだけ多くの人の口で語られればそれらしく納得するのか、彼らの証言を問題にするのは理屈に合わない。私たちは、神の力の業が聖カスバートの体にあらわれたと信じている。そう、私たちは信じている。それゆえに、私の口は主を賛美し、私の魂は主を讃える。しかしこの奇蹟の証拠というのはあまりに重大なことであるから、あなた方に示された腐敗もない聖なる遺体が、私たちにも示されるよう要求するなら、私は無分別なことをしていることになる、無分別でもなければ、不必要なことをするのでもないようにみなされるべきである。完全な慈愛は畏れを振り払うから、大いなる愛情からあえて申し上げるが、お願いしたいことがある。慈愛に免じてお許し願いたい。ここで起きている問題は、私たちの願いをいっそう強くするものだが、私たちの兄弟である修道院長の心にある疑い、それは、他の人々の証明によって取り除かれるのでなければ、あなた方に対するまさに訴えとなってあらわれるだろうし、将来、同じ考えを多く引き起こすことになるだろう。というのは、思うに、なかなか信じてもらえないということ自体、神意から出ているのではないのか。重大な侮辱ではないかとあなた方が思っていることから、天の配合によって、あなた方の教会にとって、さらに大きな栄光が生じてくるだろう。あなた方が喜んで私たちの要請に応じ、私たち自身耳にしただけの事が、目で見て明らかになれば、同じ経験を通してあなた方と私たちの証言に確証がもたらされることになり、反論者の誹謗中傷は、すぐに止むだろう。私たち、自分自身の目でそれを確かめた者たちが、さらにそれぞれの方向にむけて帰路につけば、世界中にそのことを広めていくことになる。そうなればなるほど、聖カスバートにおける神の栄光が広く知られることになるだろう』」(14)。

この意見に、修道士たちは同意することになる。

「尊敬すべき修道院長の要請に急いで従う必要はないと修

道士たちが考えたのでなかったならば、司教は直ちに彼の請願に同意していただろう、修道士たちは、もし、軽々しく聖なる遺体をまた人目にさらすのなら、恐ろしい罰が下るのではないかと恐れていたのである。最後には、思慮深い友人たちの説得に影響されて、彼らを信ずるに値しないと主張する修道院長は除き、彼らの慎ましく敬虔な請願者に、さらにそれにふさわしいと思われる人々に、その奇蹟の再度の調査を認める、と彼らはしぶしぶ承諾したのである。しかし説得によって、ついに彼らは疑義をとなえた人物をも承認した。疑り深い人は他の人々の信仰をも疑り深くしてしまう、彼らの証言からは受け入れられなかった奇蹟を彼が自分の目で確かめるということに、修道士たちは同意したのであった。論争はこのように決着がつき、トゥルゴが先導し、その後を前述のセーの修道院長、セント・オールバンズの修道院長リチャード、ヨークの聖マリア修道院長スティーヴン、セルビィの聖ゲルマヌス修道院長ヒューが続いた。彼らはすべてアルバをまとっていた。アレグザンダー、スコットランド王エドガーの弟で彼自身が後には王となる、そしてウィリアム、この時はダーラム司教のチャプレーンで後にカンタベリー大司教となる人物が続いた。そのあとに 40 人の人物、彼らの何人かは修道士であり、他は世俗の聖職者たちで、しかし、すべてが敬虔な一生に自らを捧げていた人物たちである。さらに多くの教会のメンバーが従った。彼らは、教会に祭壇を奉献するために丁度司教の近くに居合わせたのであった。集った人々によって敬虔に祈りが捧げられると、神聖な遺体が内陣に運ばれた。そしてこの前棺を閉めた修道士たちによってそれが開けられると、トゥルゴは手を挙げ、セーの修道院長以外の人間が、遺体やそれに関連するいかなるものにも触れないよう厳しく制止した。彼は他の人々には、そのそばにじっと立って、彼ら自身が手よりも目で真実をつかむように命じた。さらに、修道士たちには何が起きているのかしっかりと注意を払って見ているよう命じた。誰も遺体を包んでいる衣から、糸の一筋たりとも、いかなる方法をもってしても持ち去ることがないように、油断なくずっと見張っているよう指示した。彼の命令は実行された」(15)。

ついに遺体の検証が始められた。この検証に立ち会ったアレグザンダーがスコットランド王となるのは、1107 年、セーの修道院長ラルフ（Ralph d'Escures）がカンタベリー大司教に選出されるのは 1114 年、そしてダーラム司教のチャプレーンを務めたウィリアム（William of Corbeil）がカンタベリー大司教となるのは、1123 年である。つまりこの文書は 1123 年以前に書かれたものではないということになる。

「前述の修道院長が、教会の一人のメンバーに手伝われて、頭部の周りの衣をはずし、みなの目の前で、両手で少し持ち上げ、いろいろな方向に曲げてみたところ、完璧に首の関節とつながっており、しっかりと体についていることが分かった。彼は次に耳を持ち、荒っぽく前後に引っ張った。さらに手で丹念に体の他の部分を調べていくと、体は固い筋肉と骨から成っており、柔らかい肉で覆われていることを見出した。それどころか頭を持ってゆさぶり、あまりに上に持ち上げたので、ほとんどその静かな安置場所に座っているように見えた。しかも念入りな調査によって何事も見逃さないように、足に関してもその完全な状態を確かめようとした。何人もの人々が、このような場面を恐ろしくて直視することができなくなり、目を手で覆い、彼は真実の証明にこだわり過ぎており、事実は明らかにつかんでいると抗議した。しばらくして敬虔な調査者は腐敗しなかった奇蹟の真実を十分すぎるほど調べ上げると、彼は集まった人々の真ん中で声をはり上げ、大声で叫んだ。『兄弟たちよ、ここにある体は確かに死んで横たわっている。しかしそれは、聖なる魂が天に昇る際、後に残した時のもののように、健やかで全きものだ』。

その日この後、元のとおりに聖なる遺体についてすべてが整えられると、そこにいた人々は、修道院の修道士たちが真実を語っており、信ずるに値すると断言した。さらに少し前、彼らを信ずるに値しないと決めつけた人物も、どう思っているかは別にして、他の人々同様、彼が以前に否定したことは信ずるに足ることだったと断言した。彼らはすぐさま Te Deum をおごそかに歓喜の内に歌い始め、全ての必要なことはきちんと整えられ、父の聖なる遺体は運び手の肩にのせら

れた。全能の神を讃える聖歌隊が歓びに満ちた賛美歌を響かせた。様々な聖遺物、他の聖人の遺物箱が先に、そして聖カスバートの遺体が……それに続き、ドアから外へ運び出されると、待ちかまえていた群衆が、喜びから涙を流して殺到したので、そのぎっしりつめかけた人々をかき分けて、聖人の遺体を前に運べないほどであった。歌い手の声は、祈りや、歓喜や、うれし泣きの声が入りまじった大きな声によってかき消された。新しい教会堂の周りを回って、行列は東の端で止まり、司教がそこで説教を始め、彼のそばに人々を立たせたまま、人々に、418 年間に及び遺体が腐敗しなかったという奇蹟を見て調べ、そのことに彼らがあずかったのだと伝えた。彼らの敬虔な心に天上の恩寵が示されて、むくいられるということ、彼らにとってのその新たな歓びによって、神への感謝の念が高められることになる。その日が過ぎていき、司教（ラヌルフ＝フランバルド）は説教を続けた。当面の問題にはあまり関係のない事に触れ、多くの聞き手は彼の冗長な論議にうんざりとなった。その日、空は、雲一つない明るさで、大気には雨が降るような気配は少しもなかったのだが、突然土砂降りの雨が降り始め、修道士たちは説教をさえぎり、聖人の遺体が入った棺をつかむとあわてて教会堂に運び入れた。彼らがそうするやいなや雨は止んだ。このことから推測されることは、神の僕の聖なる遺体が、それ以上神聖ならざる地面の上に留め置かれるのを、神が心楽しまなかったということである。この他に見過ごすわけにはいかないのが、土砂降りの雨にもかかわらず、その時雨にさらされた教会のすべての装備品や、彼らが身につけていた、いつもより立派なローブが、美しさについてもその使い勝手についても雨で傷むということがなかったことである。聖なる司教（聖カスバート）の体はついにきちんと本来の場所に戻され、荘重なミサが執り行われた。……　腐敗していない遺体の証明あるいは移葬が行われたのは、その埋葬から 418 年と 5 ケ月 12 日後のことである。それは 1104 年ヘンリー王の 5 年目にあたり、司教ラヌルフの 6 年目、天地創世からは 6303 年目のことである」(16)。

この『移葬記』の作者は、修道士たちの「畏れ」に何度も触れ、さらに遺体の埋葬された棺についてベーダに言及している。遺体の検証に関しては、異議を唱える外部の人物の登場と、その結果行われた、聖俗の有力者立ち会いのもとでの再度の検証について語っている。そして最後に突然の雨を奇蹟として記しているのである。つまり、すべて遺体が本物であることを主張するいわば「仕掛け」であると言えなくはない。

最後に司教（ラヌルフ＝フランバルド）に言及し、本稿を終わることにする。

Ⅳ　司教と修道士

『移葬記』最後の記述がフィクションであろうとなかろうと、司教が揶揄の対象となっていることにかわりはない。検証の場を取り仕切ったのは司教ではなく副修道院長のトゥルゴであった。彼は、司教ウィリアム（of St. Calais）の時代には archdeacon を務め、修道院と司教区の管理を長期にわたり任されていた。

一方、修道士出身の前任者と異なり、在俗聖職者であったこの時の司教ラヌルフ＝フランバルドという人物は、なかなかしたたな人物として知られている。もともと国王ウィリアムⅡ世（ルフス）の側近として頭角をあらわし、各地の司教職が空位になると、有能な管理者として登場しては国王収入を増やしたといわれる。司教就任にあたってはシモニアの疑いもかけられた。有徳の士とは言い難く、美食に目がなく、好色で、強欲、無慈悲な性格、敵に捕らわれれば、言葉たくみに相手を丸め込んで自分を解放させるパワフルな人物として記憶されている。ヘンリーⅠ世が戴冠後 10 日目に横領の嫌疑でロンドン塔に押し込めた際にも、ロープを密かに持ち込ませ、看守がワインで酔いつぶれた隙をついて脱出し、準備されていた馬を駆って英仏海峡を越え、ノルマンディーに逃亡したという。半年後の 1101 年、7 月 20 日、ポーツマスに上陸し、司教として不適格の烙印を何度も押されながら、司教の職務そのものには忠実であったらしい(17)。

この時代、ノルマンディ出身者がイングランドの司教職のほとんどを占めていた。ヘンリーⅠ世の治世半ばではその数

4 分の 3 以上と言われる。さらに司教となる人物が在俗聖職者であるか修道士であるかは、司教座付属修道院によっては大きな問題になりうる。

当時のダーラム司教区は、前任者の司教ウィリアムの時代に築かれた修道士と司教の協調関係によって、経済的安定がもたらされ始めていた。そこに目を付けたのが国王の補佐官ラヌルフ＝フランバルドだったのである。しかも聖カスバートの移葬が無事終了し、なおかつ遺体が分割されなかったということは、他の聖人の場合に発生したような修道院間の争いが回避されたことを意味する。大聖堂建設事業を推進する上で、聖カスバートの墓所としての位置づけが、ダーラムの収入に影響を及ぼしたにちがいないことは否定できない。『移葬記』は修道士の優位性を前面に出してはいるが、聖カスバートの移葬という出来事によってその恩恵を被ったのはこのラヌルフ＝フランバルドも同様である。(18)

註

＊本稿を成すに至った動機は二つある。当時のダーラムにおける聖カスバートの遺体の位置づけに近づきたかったことと、『聖カスバート伝』写本（オックスフォード、ユニヴァーシティ、カレッジ、165 番写本）での聖カスバート像についての素朴な疑問からであるが、後者ついては結論を急ぐ問題でもないのでここでは言及しない。

(1) Patrick. J. Geary. *Furta Sacra: Thefts of Relices in the Central Middle Ages* (Princeton, 1978, rev. 1990); "Saints, Scholars, and Society: The Elusive Goal," in *Saints: studies in hagiography*, ed. Sandro Sticca (Binghamton, 1996), pp. 1-22. 尚、後者については以下に翻訳がある。P・ギアリ著『死者に生きる中世』杉崎泰一郎訳　白水社　1999 年、　14-35 ページ。cf. Peter Brown, *The Cult of the Saints: Its Rise and Function in Latin* Christianity (Chicago, 1981), 特に第 5 章。Stephen Wilson, *Saints and Their Cults: Studies in Religious Sociology, Folklore and History* (Cambridge, 1983), pp. 1-53.
ここで言及した聖カスバートの奇蹟に関しては、Two *Lives of Saint Cuthbert: A Life by an Anonymous Monk of Lindisfarne and Bede's Prose Life*, ed. & trans. Bertram Colgrave (Cambridge, 1940, 1985), pp. 299-307. *Bede's Ecclesiastical History of the Engrish People*, eds. Bertram Colgrave and R.A.B.Mynors (Oxford, 1969, 1981), pp. 444-449，ベーダ著『イギリス教会史』長友栄三郎訳　創文社 1964 年　356-359 ページ。

(2) *Two Lives of Saint Cuthbert*, pp. 290-295. なお、本稿における引用文中の省略箇所はすべて筆者によるものである。

(3) ibid. pp.130-133.

(4) 遺体の移動に関しては、David Rollason, "The Wanderings of St. Cuthbert," in *Cuthbert, Saint & Patron*, ed. David Rollason (Durham, 1987), pp. 45-59, 小論、「聖カスバートの死後奇蹟」本学紀要『藝術』21、1998 年、68-77 ページ。年代記を記した 12 世紀のダーラムのシメオンはリンディスファーンからノーサムへの一時的移動に関しては沈黙している。移動について記すことが、正統性を主張するためには負の要因になるとみたのではないかと考えられている。William M. Aird, *St. Cuthbert and the Normans: The Church of Durham, 1071-1153* (Woodbridge, 1998), pp. 24ff.

(5) Historia Dunelmensis Ecclesiae, in *Symeonis monachi opera omnia*, vol. I .,ed. Thomas Arnold (London, 1882-5), pp. 247-61. この移葬記については、C. F. Battiscomb, ed., *The Relics of Saint Cuthbert* (Oxford, 1956), pp. 55-64.　を参照。尚、同書 pp. 99-107 にはここで取り上げた移葬記の英訳が、pp. 107-112 には 1165-1172 年に書かれたダーラムのレギナルドによる移葬についての記述の英訳が含まれており、訳出にあたってはこれを参照。cf. David Rollason, *Saints and Relics in Anglo-Saxon England* (Oxford, 1989), pp. 225-226., Barbara Abou-El-Haj, "Saint Cuthbert: The Post-Conquest Appropriation of an Anglo-Saxon Cult," in *Holy Men and Holy Women: Old English Prose Saints' Lives and Their Contexts*, ed. Paul E. Szarmach (New York 1996), pp. 177-206.

(6) Barbara Abou-El-Haj, *The Medieval Cult of Saints: Formation and Transformations* (Cambridge, 1994), pp. 51-54.

(7) Historia Dunelmensis Ecclesiae, pp. 249-250.,Battiscomb, p.100.

(8) Historia Dunelmensis Ecclesiae, pp. 251-2., Battiscomb, p.101. ここで見つかった福音書については、Battiscomb, pp. 356-374.

(9) Historia Dunelmensis Ecclesiae, pp. 252-3., Battiscomb, pp. 101-2.

(10) 「畏れ」については、Wilson, pp. 29-31. 聖カスバートの死後奇蹟に関しては(4)の小論で言及した。Bertram Colgrave, "The Post-Bedan Miracles and Translations of St. Cuthbert," *in The Early Cultures of North-west Europe, H. M. Chadwich Memorial Studies*, ed. Sir C. Fox and B. Dickins (Cambridge, 1950), pp. 307-32.

(11) Historia Dunelmensis Ecclesiae, pp. 253-4., Battiscomb, pp. 102-103.

(12) Historia Dunelmensis Ecclesiae, p. 255., Battiscomb, pp. 103.

(13) 申命記 19 章 15 節。

(14) Historia Dunelmensis Ecclesiae, pp. 255-7., Battiscomb, pp. 103-105.

(15) Historia Dunelmensis Ecclesiae, p. 258., Battiscomb, pp.105.

(16) Historia Dunelmensis Ecclesiae, pp. 258-261., Battiscomb, pp. 105-107.

(17) R. W. Southern, *Medieval Humanism and Other Studies* (Oxford, 1970), pp. 183-205., J. O. Prestwich, "The Career of Ranulf Flambard," in *Anglo-Norman Durham 1093-1193*, eds. David Rollason, Margaret Harvey, Michael Prestwich (Woodbridge 1994), pp. 300-310.

(18) William M. Aird, pp. 142-183., S. J. Ridyard, "Condigna veneratio: Post-Conquest Attitudes to the Saints of the Anglo-Saxons," in *Anglo-Norman Studies*, IX 1986, pp. 179-206. 特に、pp. 198-200.

＜付記＞

本稿は平成 11 年度塚本学院研究補助費による研究の成果の一部である。